

中国北京におけるモンゴル民族移民二世の社会統合

文化的アイデンティティをめぐって

長崎大学・賽漢卓娜

本発表の目的は、国内移動でありながら異なる文化圏を移動した両親の元で育ったモンゴル民族第二世代が、いかに親の民族的文化背景や文化的アイデンティティを保持しているかを分析し、大都市北京で広げられているモンゴル系移民二世の社会統合の特徴を明らかにすることにある。社会文化的統合に関しては、言語、配偶者選択、文化的アイデンティティといった点から検討する。

1949年に毛沢東は国家建設、民族区域自治および共産党の民族政策を徹底的に実行するため、少数民族幹部を養成する指示を出した。1950年に設立された中央民族学院には主な任務として、①国内各少数民族が区域自治及び政治、経済、文化建設をするための高級中級の幹部を養成する、②中国少数民族問題および各民族の言語文字、歴史文化、社会経済を研究し、優れた歴史文化を紹介また提唱する、③少数民族言語文字における編集、翻訳作業を組織、リードすることが与えられた。続いて、少数民族の文字による図書を出版する国家出版機構民族出版社、民族言語文字翻訳局、中央人民放送や国際放送の少数民族言語部門が相次いで設立された。教育、翻訳、放送など業界における人手不足のため、中央民族学院および少数民族地域の主な大学は文化大革命の期間を除き、少数民族地域出身の優秀な人材を選抜して北京の上記の各機関に送り込んでいた。北京におけるモンゴル民族の人口は「大分散、小集住」の特徴を呈している。上記の職場は、住居と一体化しているコミュニティが形成していることが特徴である。

本発表では、1950年代～70年代に来京したモンゴル民族高学歴専門スタッフ（第1世代）の成人した子女～30代～50代までの年齢層15人（第2世代）（調査継続中）に、社会統合の特徴を、筆者によるライフヒストリーを構成する半構造的インタビュー調査に基づいて分析する。調査結果として、1. 経済的側面では、専門職／高学歴の文化エリート第1世代に比べ、第2世代は、学歴は低めで職業が多岐に渡る。職業を転々とした経験が多くみられるが、そこには「自由」、「遊牧性」、「探求のプロセス」があった。2. 社会文化的側面では、①言語：第二世代は北京語能力に長け、程度に差があるが、母語を聞き取れ、簡単な会話能力があり、読み書きはほとんどできない。②配偶者選択：民族性や文化的類似性を強調し、同じモンゴル民族と結婚する人がいる一方、女性を中心にモンゴル人男性の悪嗜好を回避すること、また戸籍上の「モンゴル人」よりもモンゴルの特質を重視し、そういった特質をもつ異民族男性と結婚する傾向がみられる。③文化的アイデンティティ：混乱する幼児期の記憶、「モンゴルの」のすべてを抵抗し「北京的」へ吸収されたい小学校・中学校の記憶は共通にある。その後「モンゴル」への回帰は想像するに留まるか、「父親と一緒にモンゴルに関する資料を読む」「モンゴル言語文化クラスへ通う」「毎年夏里帰り、冠婚葬祭もがんばって参加している」など、ギャップを感じながらも「モンゴル」に積極的にアプローチし、さまざまな形で「ルーツ」へ旅するかで分かれていく。

第1世代は民族コミュニティに在りながら、「グローバル・ヴィレッジ」と頻りに交渉しているのに対し、第2世代にとって、北京にある民族コミュニティは「トランスナショナル・コミュニティ」である。政策の下で地理移動を行ったモンゴル人第一世代のコミュニティの「文化的孤島」的な特徴と違い、北京育ちの第二世代は、コミュニティを心の拠り所にし、「文化的狭間」を経験しながら社会統合されていることを試論する。